

[要旨]

「社会学的記述」再考

前田 泰樹

エスノメソドロジーにおいて、文脈を編成することや、文脈から外れることは、その実践に参加する人たちにとっての問題である。本稿の目的は、こうした脱／文脈化を行う実践を記述するための方法を、具体的に例証することにある。

そのために、第一に、ガーフィンケルとともにエスノメソドロジーを創始した、H・サックスの「社会学的記述」についての議論を概観する。この議論が示しているのは、行為を記述のもとで理解することが日常的な概念の用法に基づいていること、そして、行為を記述すること自体が、特定の文脈における一つの実践であること、である。その上で、記述と、その記述がなされた文脈との関係について、それが相互反映的なものであることを示す。

第二に、C・ギアツが同名の論考において引用したG・ライルの概念である「厚い記述」について再考し、「厚い記述」と「薄い記述」の区別が相対的なものであり、複数の記述がただちに対立したり矛盾したりするものではない、ということを示す。その上で、急性期病棟の管理室での看護師たちの実践の事例を分析することによって、複数の記述が可能な場合の、複数の文脈を提示する方法を例証する。

第三に、I・ハッキングが『魂を書き換える』においてとりあげた、新しい概念のもとでなされる過去の遡及的記述の問題について再考する。この著作における「児童虐待」をめぐる論争は、複数の記述の間で実際に対立が生じている際だった事例であるが、本稿では、そうした論争自体を一つの現象として記述していく方向性を提示したい。その上で、遺伝性疾患を生きる当事者たちの語りの事例を分析することによって、複数の記述が並置されうる場合に、その文脈を特定していくための方法を例証する。

これらの作業を通して、脱／文脈化を人々の実践として扱っていく、エスノメソドロジーの方向性を提示する。